# 『晩年の詩』に於けるイマージュの諸相
## ——試論（Ⅱ）——

沖　満洲子

## Ⅰ　序

先に「マルグリット・ド・ナヴァールの宗教詩に於けるイマージュ」[1] 研究（Ⅱ）として，『晩年の詩』の中の最長篇詩『牢獄』(Les Prisons) を取り上げた。[2] 本稿は，それに続くものとして，同詩集中の他の作品を，『牢獄』で採集分類したイマージュと比較検討してみようとするものである。

## Ⅱ　テキスト

(1)　何故『牢獄』か。

ここでテキストとして扱う Abel Lefranc 版『晩年の詩』は，1898年に序文と註をつけ初めての作品集として出された，極めて古いものであり，Edition Critique（校訂本）では勿論ない。A. Lefranc が当時可能な限りの作品を集め写本を調べて補整した作品集である。序文と註は付けられているが，充分とはいえない。序文は同詩集の主要作品について書かれているが，特に『牢獄』と『書簡詩』にみられるフランス王家の伝記的年代的興味が勝っている。註は，用語解説 (glossaire) と写本に関する註記である。作品の典拠，文体，韻律等の文学的検討は殆どない。[3]

私が試論（Ⅰ）で最初に作品『牢獄』を取り上げたのは，作品が宗教詩として最も重要なものであったばかりでなくテキストとしての信頼性も一つの理由であった。マルグリットの第三期の作品には，現在のところ「Heptaméron」を除いて，Edition Critique は三版しかない。[4]

① G. Dottin 版「Chansons Spirituelles」(1971).

② R. Marichal 版「La Navire」(1956).

③ S. Glasson 版「Les Prisons」(1978).

近代の研究書として③の Glasson 版が一番新しく信憑性の高いことは，言うまでもない。

『牢獄』以外の作品で宗教詩として次に重要なのは『船』(La Navire) であり，本論はこの作品を中心にイマージュ研究を展開してゆきたい。

(2) 他の作品について

『晩年の詩』の他の収録作品は大別して次の三つになる。

1) 書簡詩 (Epistres) (I～X)

2) コメディー (Comédies) : ①王の死についての劇 (Comédie sur le trespas du Roy)。②モン・ド・マルサンで上演された喜劇 (Comédie jouée au Mont de Marsan)。

3) 抒情詩 (Poésies Lyriques) (I～LXXIV)

本論の対象となるものは宗教詩であり，上記の作品群について，その点を検討してみたい。

［A］ 書簡詩・10篇，そのうち3篇は娘ジャンヌ・ダルブレ (Jeanne d'Albret) の作品。従ってマルグリットのものは7篇である。

—Epistres III, IV, VII は，ジャンヌからマルグリットへ，

Epistres II, V, VI, VIII は母から娘へ—

二人の書簡交換は，マルグリットの最後の年，1549年5月頃，行なわれた。丁度その前年，母の反対にもかかわらず，Moulins でアントワーヌ・ド・ブルボン (Antoine de Bourbon) と結婚式を挙げた娘ジャンヌが，ポー (Pau) の母を訪れる。二人でコートレ (Cauteret) を旅した後，母と別れ迎えの夫のもとに喜々として去って行く娘。これが永遠の別れと予感している母親の悲しい気持。母と夫への愛情に揺れる複雑な娘の気持。特に，マルグリットの VI, VIII の書簡詩は，胸をえぐる悲しい激情が雷・雨・地震のイマージュと共に，読む者の感性につきささってくる。（ちなみにマルグリットはその年の暮れ1549年12月21日，ポーから遠くない郊外の Ödos（オードス）の城で一人淋しい死を迎える。11才年下の二番目の夫アンリ・ダルブレ (Henri d'Albret) は，その時遠く Paris に在った。）

Epistre I は，1547年3月31日のフランソワ一世の死後，甥アンリ二世 (Henri II) に宛てたもの。新王としての甥に対する気持は『船』の中にも語られている。Epistre IX は Néo-platonisme の表現にあふれ，[5] マルグリットと Fontevraut の Abesse(女子大修道院長)との友情がテーマである。最後の Epistre X は，病いに伏している Orthe の大法官 (Protonotaire) を慰さめるためにユーモアに満ちた薬の処法をすすめる唯一陽気な色合いと快活な気分に満ちたものである。[6] P. Jourda は一種の冗談 (badinage) だと決めつけている。[7] いづれにせよ，Epistre は純粋に宗教的テーマを扱ってはいない。

すべて十音綴 (décasyllabe)，約30行～約200行（特に50行前後の詩が大方を占めている。）

［B］ コメディー・「テーマ」は宗教的であり，特に「王の死……」は『船』を創作するだけでは愛する弟王の死の悲しみを鎮めることが出来なかったマルグリットのもう一つの作品として重要である。いづれ，コメディーだけを別項で取り上げたい。

［C］ 抒情詩・全部で74篇，通し番号が付けられ，(I～LXXIV)，番号のみのものと，題名があ

るものに分けられる。抒情詩に関しては，P. Jourda も，二行詩「神と人の対話」以外は全く触れておらず，[8] ここで少し詳しく整理しておきたい。抒情詩は，まづ，次の四項に大別される。

(a) 「10行詩による真実の愛の弁別」(La distinction du vray Amour par dixains) (I～XXIII) 23篇，愛の諸相がテーマであるが，宗教的愛は扱われていない。十音綴。

(b) 「シャンソン・スピリチュエル」(Chansons Spirituelles ((XXIV—XXXV) 12篇。「シャンソン・スピリチェル」は G. Dottin 版の Edition Critique があることを既に述べた。Dottin 版は1部，2部に分かれており，Lefranc 版には第2部の15編中，12編が収められている。（この中には詩節の欠落しているものもある。）第2部のシャンソンは，また「後期のシャンソン」(Dernières Chansons) とも呼ばれている。Dottin の各シャンソンに付けた番号に従うと，第二部は，ch. 33～ch. 47 まで，Lefranc 版はそのうちの ch. 37, ch. 40, ch. 46 が欠けていることになる。[9] テーマは勿論，宗教的であるが，P. Jourda の指摘している通り，リズムと動きに勝れ，絵画的イマージュは少ない。[10] マルグリットの作詩法の進歩によるものであろうが，イマージュ・ディナミック（動的イマージュ）[11] を考える点で興味深い。

(c) 「対話」(Dialogues) 対話形式の二篇がある。(XXXVI, XXXVII)。

① 「レギュリュスとリュキア」(REGULUS ET LUCUIA)。お互いに恋人のいる男女の完全な愛 (Amour parfaite) がテーマ。8音綴 (octosyllabe)。各 stance, 5行 (quintil), 全70行。

② 「神と人間の対話」(Dialogue de Dieu et de l'homme)。マルグリットに親しい宗教的テーマ「全と無」(Tout et Rien) のテオリーが対話形式でより明快平易に語られている。『牢獄』「第三の書」の骨子ともいえる。イマージュの点でも興味深いが，対話形式なので「二つのコメディー」と一緒に扱いたい。10音綴。各 stance が2行 (distique) の対話形式，最終 stance のみ5行詩である。全57行。

(d) 「哀歌」(Elégies) は36篇 (XXXVIII～LXXIV)。うち次に挙げる5篇 (XXXVIII, XXXIX, XL, XLI, XLII) には題名が付けられていてかなり長い。残りの31篇 (XLIII～LXIV) は，「10行詩と寸鉄詩」(Dixains et Epigrammes) としてまとめられ，最初の2篇にだけ題名が付いている。テーマは，数篇を除き世俗的愛 (Amour profane) である。

① 「さらば」(Les Adieux) (XXXVIII)。不実な恋人に別れを告げる女の感情が連綿とつづられ，マルグリットの二番目の夫アンリ・ダルブレとの当時の関係を想像させられる。10音綴，171行の長詩。各 stance 8行 (huitain)。最終 stance のみ4行詩 (quatrain)。各詩節は「さらば」(Adieu) の始まりが繰返されるか，詩節中に必ず「さらば」を挿入している。「Les Adieux」以下の Elégies について Lefranc は Le Roux de Lincy et Anatole Montaiglon 版の「Heptaméron des Nouvelles」第一巻，p. CCXL～CCL に載せられている詩を補うものと註記している。[12] 私の手元にはその SLATKINE REPRINTS 版[13]しかない。その第四巻の初めに (pp. 14

～182) に，Saulnier 版の「世俗劇」(Théâtre Profane)[14] に収められている四つの劇と「Poésies inédites」,「Les A-Dieu des Dames de chez la Royne de Navarre allant en Gascogne à Madame la Princesse de Navarre」等のマルグリットの詩が集められている。おそらく前記の「Heptaméron に載せられている詩」とは，その題名「Les A-Dieu…」から，この最後のものを指していると思われる。Lefranc のいう第一巻が REPRINTS 版では第四巻になっている経緯は，不明である。

② 「友愛」(L'Amitié) (XXXIX)。裏切られた愛情への恨みがテーマ。前の「Les Adieux」に続く心情がみられる。10音綴，19行詩。第3 stance の3行詩 (tercet) を除く，3つの stance は，4行詩である。

③ 「ある婦人への助言」(Conseil à Une Dame) (XL)。恋人を失なって尼寺行きを決心している女に，現世の愛の楽しさ幸せを説き勧める。やや，からかい気味のやさしい調子で，人間味を感じさせる。10音綴，66行。

④ 「愛の死」(La Mort d'Amour) (XLI)。恋人の裏切りと愛の移ろいと死を「バラ物語」風のアレゴリー (嫉妬 Jalousie, 疑惑 Souppecon, Doute, 不在 Absence etc) を用いて描く。10音綴，136行。

⑤ 「愛の秘密」(Secret d'Amour) (XLII)。男が秘めやかな恋心を宮廷恋愛風な優雅さで告白する。10音綴詩，86行。各 stance 4行詩，最終 stance 7行詩 (septain)。

⑥ 「十行詩と寸鉄詩」(Dixains et Epigrammes) (XLIII～LXXIV)，最後のこの詩群は，全部で32篇。テーマは前述の「愛の弁別」(La distinction…) と同じく「世俗的愛の諸相」。マロ風の洒落たもの，宮廷恋愛風の Amour parfaite と imparfaite (愛の完全さ不完全さ) を対比させたもの等マルグリットの宮廷女性としての雅と教養が感じられ楽しい。Epigrammes は最終行の警句 (pointe) が，貫用的ながら軽妙に利いている。マルグリットの作詩力を知らされる。しかし，習作程度のものもある。最初の2つの4行詩 (XLIII, XLIV) には各々，「忍耐」(Patience) と「オルフェ」(Orpheus) の題が付いている。「忍耐」は素朴な作風で愛らしい。12音綴 (Alexandrin)。

宗教的愛のテーマを扱ったものは，Néo-Platonisme のテーマを持つものを含めて，唯の3篇に過ぎない。4番目の「XLVI」，5番目の「LII」15番目の「LVIII」である。

ⓐ 「XLVI」: 自分の目が耐えがたい光で輝く「太陽」を眺める幸せをうたう。神と恋人の瞳を重ねた Néo-Platonisme がテーマであり，Pétrarque 的な詩風でもある。イマージュは，貫用的なものにすぎない。(le soleil, la grande doulceur de son ray gratieux. L'estreme feu qui brusle terre et cieulx. etc.) 十音綴，11行詩 (onzain)。

ⓑ 「LII」: 現世の欲望 (désir) に捕えられた者は，哀れにも十度ならずその霊魂は地獄で練

磨の責苦を受ける。天国の幸福に至るまで苦悩から苦悩へと翻弄される（v. 7〜v. 11)。10音綴，11行詩。

ⓒ「LVIII」: 神と真実の愛に苦悩した者キリストは十字架上にあって，人間に心の泉を開く慈愛（Charité）を持っている（v. 1〜4)。空しい愛（Amour vaine）を持つ者は救い主を理解できず，己れの為に他者を死に至らしめる偽キリスト（Antechrist）である（v. 5〜10)。キリストと偽キリストの Antithèse（対照)，3篇中最も宗教的テーマである。十音綴，11行詩。

36篇は形式上次のように分類される。

1. 10行詩（dizain）: 16篇
2. 4行詩（quatrain）: 3篇（XLIII, XLIV, XLIX)
3. 11行詩（onzain）: 8篇（XLVI, XLVII, LI, LII, LIII, LVII)
4. 次の5つは各1篇づつ。

5行詩（quintil）: LXXII

6行詩（sixain）: LXXIII

8行詩（huitain）: LXVI

9行詩（neuvain）: XLVIII

14行詩: L.

また，殆どが十音綴で28篇あり，他に Alexandrin（12音綴）3篇（XLIII, XLIV, LXXIII)，八音綴（octosyllabe）1篇（LXVI）である。Rime（脚韻）については別の機会にゆづる。

(3)『船』(Navire) について，

『晩年の詩』は，既に『牢獄』でみてきたように，マルグリットの生涯の親しき者達の死に満ちている。『船』はその最愛の弟王フランソワ一世の死の直後，悲しみを鎮めるために書かれた長い抒情詩である。この作品は，写本の時点では題名を持っていなかった。「Navire」（船よ…）で始まる有名な詩句[15]から，一般に『船』(La Navire) と呼ばれるようになった。G. Paris は「姉マルグリットへのフランソワ一世の慰め」(Consolation de François Ier à sa sœur Marguerite) という題名を提唱している。[16] 私が本論で Texte として取り上げる R. Marichal 版の題名は，この両者の折衷である。しかし，冒頭の詩句を除いて作品中に「船，海，航海」の詩句，イマージュはない。

詩は，弟王フランソワ一世の死を悼み嘆き悲しむマルグリットを夢の如く突然現われた王が慰めるという文字通りの筋書きをとっている。しかし，王の慰めも，生前のなつかしい想い出（凛しい王の姿，優雅で気高い物腰，尊厳に満ちた数々の武勇功績）によって消し去られ，マルグリットの嘆きは深まるばかりである。幾度とない慰めと嘆きの繰返し。やがて現世に残るマルグリ

ットの身を案じ，王の慰めは励ましと諫めにかわる。「現世的嘆きに執着することは空しく，肉体の死は神（天上）への入口（porte）である。肉体を離れた魂は，天上で真の至福を受ける。死は祝福されねばならぬ。」と王は説く。『牢獄』「第三の書」の説喩を思わせる。神の真の愛に目覚めたマルグリットは，己の老令（当時55才，2年後マルグリット自身の死を迎える）を考え，さらに，王家一族の悲嘆を思う。本来の自己を取り戻したマルグリットはフランソワ一世の二番目の王妃エレオノール（Eléonor），甥のアンリ二世，その王妃カトリーヌ・ド・メヂチス（Catherine de Médicis），そして家臣達への慰めに，力をそそぐ。『牢獄』の場合より，抒情詩形式だけにさらに悲痛な調子，現実感を滞びて読む者の胸をつく。その嘆きが教会の葬送の鐘のように鳴り渡る。[17] 分別を取り戻した姉を見て，フランソワ一世の魂は，安堵して，まばゆいばかりに荘厳な光りと，純白の雲につつまれて神のもとに昇ってゆく。[18]

詩は1464行にわたり，三行詩（Terza Rima），十音綴で書かれている。Marichal 版は，Lefranc 版を補足しているとはいえ，かなりの詩行が欠落していることをつけ加えたい。

## Ⅲ 『船』に於けるイマージュ

『牢獄』では，マルグリットの宗教詩に見られる絵画的イマージュを，テーマ的イマージュという観点に立って，俯瞰的に図式化してみた。本論に於いてもその図式に従い，『船』の作品テーマにそって，特徴的なイマージュを整理し，既でに得たものと合わせて考えてみたい。

『船』のテーマは ①フランソワ一世の死，②死に対する嘆きと苦悩，③苦悩する魂の神による救済，④魂の肉体からの解放，⑤魂の天上への旅立ち等である。このテーマは，勿論，イマージュの三つの図式に対応している。

1） 地上的イマージュ

まづテーマの核たる「魂・人間」は悪の象徴である「肉体」との関係に於いて描かれ，「罪の深淵に生きる人間」（Qui vit en chair, il vit en une abisme／De tout péché）（v. 328-330）として捕えられている。また「魂は邪悪な肉体の奴隷」（Mon ame est tout de ce meschant corps serve）（v. 1276-1278）である。よく知られた聖書的イマージュの「泥土で作られた人間」（v. 547-549, v. 811-813）[19] であり，Vieil Adame[20] の「古い根を持てる者」（v. 467-471）である。『牢獄』のそれと同義的イマージュといえる。

その「人間」の生きている現世は「迷宮」[21] である。

O frere heureux d'arriver le dernier
En ce mortel labirinthe et cruel,
Où l'on se doibt du chemin deffier

Et plus heureux qui au bien celestiel
Premier volas, ce plaisant jardin
Où il y a plaisir surnature　(v. 553-558)

おゝ　幸せな弟よ，後に生れて
この残酷な死の迷宮に　そこで
人は道にはずれるのであるが，

そしてなお幸せな者よ　天の至福へと
先に飛び立つ者よ　あの楽園に
かしこには　この世ならぬ歓喜がある

マルグリットは「死の迷宮の如き現世」に自分より後に生れ先に去ってゆく弟王への羨望を上の詩句で語っている。現世「死の迷宮」と「天の楽園」の対比。現世については「死にみちた谷」(v. 1060-1062) という聖書的イマージュもある。本来，滅ぶべき肉体をもって生きている人間の現世は，常に死のイマージュに色彩られているのである。

「歎き・苦悩」(Douleur. pleurer)：この死に伴う別離は，人間の悲しみ，苦悩を生む。『牢獄』では「第一の書」で主に宮廷恋愛風の歎きが描かれていたが，『船』では，弟王の死に対する歎き苦悩が繰返される。

ここではそれが，「食物のイマージュ」によって描かれる。(『牢獄』での食物のイマージュは「神の言葉」の métaphore であり，Manne, pain（天の食物）であった。)

フランソワ一世の「人間の苦しみなどはすぐ通り過ぎるもの」という慰めに対して，

Car ma douleur m'est *ung saveureux pain.*
Puisqu'ainsi est que toy, sans si mais,
Ne puis plus veoir, larmes, soupirs et cris
Seront *mon boire et agreables mectz.*　(v. 246-249)

何故なら私の苦しみは美味しいパン
もうどうしてもあなたに会えないのだから
涙，ため息，泣声は，

私の飲物，快適な御馳走，

「苦しみ」は「美味しいパン」，それに伴う「涙，ため息，泣声」は「飲物や御馳走」。また，フランソワ一世の死に神の大いなる力を感じるマルグリットは，気をとりなおして，

Dont ma douleur par toy j'ai descouverte,
Montrant ta force en ma grande foiblesse,
Qui *avaller* ne peult *ta pome verte.* (v. 700-702)

私の苦悩は，あなたによって顕わされた，
大きな弱さにあなたの力を示されて，
あなたの青いリンゴを呑み込むことの出来ないその弱さに。

「青いリンゴ」は「青」(vert) が精神的な「つらさ」を表現する「すっぱい色」であり，「リンゴ」はアダムの「リンゴ」，「人間が口にする物」というイマージュから発している。従って「青いリンゴを呑み込む」とは「精神的苦しみに耐える」という観念の表現であり，マルグリットの作品に多くみられる。[22] また，「呑み込む」という動詞 avaller も同様である。[23]「精神的苦痛」は「肉体的生理的なもの」でもあり，「食物を食べる」という肉体的欲求と心の深層で結びついている。後に「仲介的イマージュ」で述べるが，食物のイマージュは「キリストの受難のイマージュ」とも連動している。

マルグリットの宗教詩では稀れな「花のイマージュ」がこの「苦しみ」に用いられている。

弟王を愛し過ぎることは神への真の愛への罪悪である。しかし弟王の死を迎え「全ての終りであり始まりである」(fin et commencement)[24] 神のお与えになるものは全て愛そう，「苦悩」さえも，

*De l'encolye* austant j'ayme les fleurs
que de *la rose,* car de sa main je prens
Les biens, les maux, les joyes et douleurs ; (v. 727-729)

おだまきの花も私は愛する
バラの花のように，神の手から幸せも
不幸も喜びも苦しみも私は得ているのだから，

「おだまき」(l'encolye) は mélancolie (憂鬱) を想起させるところから当時貫用の「悲しみ」の Métaphore であった。[25] 神に対して地上的悪である人間の感覚を「バラのつぼみ」(ung bouton de rose) に例え「そんなものに大切な時を費やさぬように」と諭す詩句もある (v. 1389-1392)。

嘆き苦しむ己が姿を，皮膚病患者の姿に重ねた次のものも慣用的である。マルグットに弟王が「地上の肉体はむなしい」と諫める。マルグリットは，

Comme celuy a qui *la seiche rongne*
Demange tant qu'il ne se veult guerir,
Mais a gratter par plaisir s'embesongne : (v. 334-336)

疥癬をかゆがる患者のように，
病いの治癒をのぞまぬほど，
かえって，喜びかきむしる。

その患い者のように，私は苦しむことを愛していたのではと我身を反省している。中世来のイマージュ，Marichal はダンテ「神曲」の影響も見ている。[26]

「嘆き」に付きものの「涙」は先に現世を「死にみちた谷」と呼んでいたが，ここでは「涙の谷」という聖書的イマージュになっている[27] (v. 703-705)。「涙の谷」は「泉」となり，あふれる「小川」となる。マルグリットの名付け子 (filleule) である Marguerite de France[28] の「王の死に涙する姿」をみてやさしく，

O chef roial, qui *fontaine* s'est faicte,／Dont les yeux sont les abondans ruisseaux／Par fort pleurer ceste dure defaicte (v. 1030-1032)

おゝその気高きお顔は泉となった／その眼はあふれる小川なのだから／この耐えがたい死に涙しすぎて／と歌っている。「流れ出る涙の様」をフランソワ一世は「海綿をしぼるように」と形容する。血を分けた弟の言葉にも耳をかさないマルグリットに

Ce qui te faict ainsy esmerveiller／Plaindre et pleurer comme *presse esponge*／C'est que *tu dors et ne veult t'esveiller*／(v. 1318-1323)

(死) が，あなたを仰天させ／海綿をしぼるように泣かせてしまう／それは，あなたが (心) 眠っており，目覚めようとしないからだ。「泣く」ことは「水・泉・川」のイマージュに発展する。『船』の初めに弟王の死と苦悩の涙を「黒くうずまく水」に例え「食物のイマージュ」と同様「それを完全なる愛として飲み下す」という表現がある。

突然夢の中で立ち現われたフランソワ一世に,

Es tu celluy par qui l'eau trouble et noire／Sans nul espoir, il y a quatre moys／Parfaicte amour de larmes m' a faict boire ? (v. 46-48)

黒くうずまく水を如何なる希望もなく／四月前に涙の完全な愛として／私に飲ませた者なのか／と問いかけている。

悲しみの涙から発している水のイマージュは，マルグリットの体の深奥（心の奥底）から流れ出た苦しみの symbole であり，それを飲むという行為は，キリストの涙・血（命の水）に発展してゆくように思える。

「水のイマージュ」について F. Gray は，「ここに二つの例がある。そこでは，水のイマージュは一種の形而上的な概念の前進運動を形作る仕方で分類される。水はモンテーニュ自身の中で彼が見い出す動く要素の象徴化である。」[29] さらに[30]「水のイマージュはモンテーニュやプルーストの様に mouvement を愛好する者，パスカルやスポンドのように精神的苦悩者の内面的流動が，海の不可避的分解性の作動に似ている者にとって好まれるのである。」と述べている。マルグリットも同質の作者である。（本稿の「題名」のところでも触れたが，『牢獄』で見られた「海・航海」の「魂を翻弄するもの」としてのイマージュは，この作品にはない)。(「眠り」のイマージュは「死」の項で触れたい。)

「現世」の嘆きは「空しいもの」である。『牢獄』で神の御言葉が風のイマージュを持って語られていたが，『船』では「空しいもの」の表徴である。

C'est par son don qu'il m'a rendu certain／Que tous les liens et honneur de la bas／N'est riens que *vent* apportant labeur vain. (v. 832-834)

神の恵みで私には確かになった／この世のどんな財宝も名誉も／風が運ぶ空しい労苦。

さらに，嘆き止まないマルグリットに弟王は

Ne mectz donc pas mes parolles *au vent*／Croy moy, ma seur, rend ma joye accomplye／Et ne vas plus de cris ne pleur vivant. (v. 1375-1377)

だから私の言葉を風にまかしてはいけない／私を信じるのだ，姉よ，私の喜び（死）を全うさせてくれ／そしてもう嘆き叫けんだりしないように

風が運ぶこの世の財宝幸福は空しく，弟の諌めを風のように空しくしてはいけない。この「風のイマージュ」について，Gray は，「魂と肉体」の項で「外的力の餌食となっている魂」について次のように述べている。[31]「モンテーニュは，イマージュを用いて，情熱の風に魂が絶えず攻められる様子をみせてくれる。風は魂のノーマルで安定した振動を乱すのである」。「激しい烈風にさいなまれる魂」のイマージュは『船』の冒頭の詩句にもあった。[32] また Gray は，その註記(12)で，「積極的な意味で，風のイマージュは16世紀にかなり普及している。*Essais* と同じ形でセ

ーヴの *Dizains* にもみられる。風の Image Statique（静態のイマージュ）はモンテーニュ（スポンドも同様）の文章の中で『空しいもの』(le vide) をあらわしている。」[33] この註のスポンドの引用詩句に「風」と共に「羽のように」が「空しさ」を表わすイマージュとして用いられているが，マルグリットは「地上的悪」を「羽のように」軽いものと比較している (v. 682)。

『牢獄』で繰返し語られた「魂を地上に結びつける絆」は『船』では主に「肉親愛」（マルグリットとフランソワ一世）として語られる (v. 51-54, v. 94-96)。また「魂」を地上に閉じ込める「牢獄」のイマージュも少ない。(v. 148-153 では現実のパヴィの牢獄を描き，v. 312 では，『牢獄』「第一の書」と同じく，「牢」を「塔」(Tour) と呼んでいる。)[34] しかし次の詩句は，「牢」の典型的な表現語句が並んでいて興味深い。

Dieu m' a tiré de *sa terrestre garde.*
Dont tout bon cueur, ainsique *prisonnier,*
En veult *saillir* et *l'issue* luy tarde.
D'un *coffre vieulx, cage, estuy* ou *panier*
D'une *prison* et *fosse tres obscure,*
Rompue au main faicte d'hier. (v. 187-192)

「岩より堅い心」(v. 1108) のイマージュは「肉体に閉じ込められた魂」をあらわすが，『牢獄』ではその岩の間から「生命の水」が湧き出た。

もう一つの『牢獄』での主要なテーマでありイマージュであった「眼」は，類似の表現でかなりみられる。(œil aveugle ; v. 11-14＼regarder charnel : v. 184-186／l'œil intérieur : v. 482-486／oeil eslevé v. 1364.／その「眼」が Oeil de Dieu として完結する v. 1402-1407) しかし，『船』の主要のテーマのイマージュとしては用いられていない。

その他，特徴的で興味深い地上的イマージュに，Ronsard の *Les Amours* の「画家のイマージュ」の先駆と評価されている[35] フランソワ一世の美質をたたえる画家のイマージュがある (v. 751-759)。古典的イマージュとして「神の力にあらがう者巨人族 (les Geants)」が Ovide の *Métamorphose* から取られているし (v. 688-690)，「仲介的イマージュ」になるが，「黄金の矢」のイマージュもある (v. 466-468)。しかし，マルグリットの日常的感情を想起させる「喪服を縫う」イマージュは激しく悲しい。Marichal も「諺から取られたものではない」と，わざわざ註記している。[36]

Dieu l'a taillé, parquoy me le fault couldre

L'habit de doeil, la peine de ma coulpe,
Dont je ne veult nul pardon pour m'absouldre　(v. 625-629)

神は喪服を裁たれた，私が縫わねばならぬから
喪服は，私の誤ちへの罰である
私は許しを願ったりしたくはなかった。

この「誤ち」とは，愛する「弟王の死」に，もうこの世では「敵」しか見ないという片意地な決意である（v. 622-624)。

聖書的イマージュと共に描かれた次の詩句も，「苦悩」に対するマルグリットの激しい内面をみせている。

Boire je veulx le calipce et la couppe
Que m'a donné le pere et dans l'absince
Tres fort amer je tramperay ma souppe　(v. 628-630)

私は苦しみの聖杯を飲みほしたい
父（神）が私にお与えになったなら
ひどく苦いアプサン酒の中に
私のパンをたっぷり漬して

ここで "souppe" はブドウ酒やスープにひたすことから由来したパンである。[37] マルグリットの日常的感情が，やはり，かいま見られるように思える。

2)　仲介又は変容のイマージュ

『船』に於けるこの二番目のイマージュは，「死」と「キリストの受難」或は，「死と魂の救済」というテーマに集約されるように思う。

「死」・まず弟王を失なって嘆く老いたマルグリットの弱気な心をさらに脅かすような「死の使者」のイマージュ[37]が，フランソワ一世の言葉で語られる。

Bientost *la mort* après moy te prendra,
Qui ne fauldra a suivre ta viellesse :

Prepare toy quant ton heure viendra.

*Ses messagiers*, maladie et foiblesse,
T'ont desja prinse, et tes amys laissee :
C'est ta santé, force, beauté, junesse ;　(v. 853-858)

まもなく，私の後に死があなたをつかまえる。
死は老いなどにはかまけない
心をととのえよ，あなたの番が来る時に，

死の使者である病気や衰弱が
もうあなたをつかまえた，友達もあなたを拾てた
あなたの健康・力・美・若さという友達も。

「地上的イマージュ」で「苦悩嘆き」は「食物」であった。「死」も同じイマージュで語られる。

Car *le morceau de mort* que je mangeay
Me fut sy doux, encontre sa coutume,
Que *miel ou manne* a la fin le jugeay.　(v. 1336-1338)

何故なら　私の食む死の塊りは
習わしとはちがい　とても甘美であった
最後には　蜜ともマナとも思えるほど

Qui croid en luy ne craindra poinct de paistre
De *ce morceau* des infidelles craint,
Pour *ung vray pain de vie* enfin repaistre.　(v. 1345-1347)

彼（キリスト）を信ずる者はこの塊りを
食むことを決して恐れない，
不信心者が恐怖するこの死の塊りを
最後には真の生命のパンを食べるのだから

「死」は「パンの塊り」同様に「死の塊り」と語られ，事実先の詩句では「甘美な蜜の味のするマナ」にかわることを予想させ，後の詩句では「生命のパン」となる。(「マナ」は『牢獄』では聖書，神の言葉イマージュに用いられていた。)[38] 即ち，「死」は肉体の食むやはり「苦痛のパン」であり，それは，神（キリスト）のかかわりによって「天上のパン，マナ，生命のパン」に変わるのである。「死の味は，にがよもぎ（アプサン）のように苦いが，キリストが人間に代わって飲むことによって，甘美な蜜にかわる。」(v. 124-132, v. 1339-1341)。「人間の死に遭遇して途方に暮れる魂」は，ここでは「死して生きる心」という宮廷恋愛風のイマージュ[39] で描かれる。変容を待つ「嘆く心」である。(Mon cueur est mort et s'en veult contenter／Lequel encore vivant tout mort je porte : v. 1231-1232／Ainsy vivant mon ceur mort je porte : v. 1234-1236)。

「地上的イマージュ」に「嘆くマルグリットを眠っている」とフランソワ一世が諫めていたが，それは「死した心」である。「肉体の死」は「眠れる肉」(la chair endormie) (v. 1129-1131) であり，「死の世界」は「眠れる土地」(la terre sommeil) (v. 1071) と表現されている。「Comédie」には「眠る生命」(la vie endormie) (p. 107, v. 387)[40] もあり，「死」の一つのイマージュと考えられる。v. 1129 sq では，「神が肉体を眠らせることで，魂の旅立ちの苦しみをやわらげる」と語られ，《最後の審判を待つ魂は，眠っている》という「宗教改革的教義」[41] を予想させる。

『船』でもやはり「死は天上界」への「入口，門」である。[42]「狭き門」「あなたの門の内に入る」という聖書的イマージュが v. 64-66, v. 1450-1452 にある。[43]「死が天上界」への入口であれば，「死」は祝福されるべきであり，美しいのである (v. 1348-1350, v. 1351-1353)。

もう一つの主要テーマ「魂の救済」は，先にも述べたように「キリストの受難」のイマージュを用いて描かれる。このテーマは『牢獄』にもあり，マルグリットによって晩年好んで取り上げられている。[44]『船』では874行から933行まで60行にもわたった長いものである。

En sa liveur, ma seur, tu es guerie :
Il a porté sur soy tous les pechez,
Las ! tu estois sans luy presque perie ! (v. 877-879)

姉よ，蒼白きキリストのうちに　あなたは癒される
彼は，すべての罪を目差している
あゝ　あなたは，キリストなくしては殆ど滅んでいるのだ

と嘆き苦しむ姉にフランソワ一世は「病いを治す者」(医者) としてのキリストを語る。[45]「キリストは十字架の上であなた (人間) の為に苦しまれ，あなたの罪を贖われた」(Dessus la croix il les (les péchez) attachez／Souffrant pour toy ce que avois desservy) (v. 880-882)。「あなたの肉体は快楽に従い，イエスはその為に肉体を柱に打ちつけられた。神が僕のためにそうされたのだ」(Pour toy le sien fut baptu au pillier) (v. 883-885)。

人間の「傲慢」の象徴である「頭」(知識)[46] のイマージュは，茨の冠をかぶった十字架上のキリストと結ばれる。フランソワ一世は，

Ton chief d'orgueil avois voulu lyer
Luy d'un chapeau de poignantes espines
Le sien voullut pour toy humilier ;　(v. 886-888)

あなたは，その傲慢な頭を，茨の棘の
帽子をかぶるキリストの頭と結ぼうとした
キリストの頭を　己のために辱しめようとした。

と，「人間の知識」のあさはかさが，神の子キリストを侮辱するものであることを説いている。

「あなたの内なる人間の怒りの根」(l'ire／En toy avoit prens ses racines) は，イエスがそのきびしい刑罰をたえることによってやわらげられる (Voulut souffrir ses dures diciplines) (v. 889-891)。そして肥大した人間の欲望の故にキリストの意志でその胸から流れ出る聖水・聖なる血。

Ton cueur faisoit envye trop grossit,
Jesus le sien a voullu entasmer,
Dont sang et eau en a voullu yssir.　(v. 892-894)

あなたの心は欲望を太らせ過ぎた
イエスはその胸を傷つけようと望まれた
そこで胸から血と水を流されようとしたのだ。

「地上的イマージュ」で悲しみのあまりマルグリットの体内から流れ出た涙は泉となり暗い川となったが，このキリストの「聖なる水・聖なる血」に清め消され，マルグリットの心に安らぎを

与えたように思える。

さらにフランソワ一世は,「このやさしい救い主 (Ce doux sauveur) が, その哀れな被造物 (Sa pauvre creature) に愛し方を示される (monstre bien comme aimer)。だからその開かれた胸 (ce cueur ouvert) を敬わねばならない」とすゝめる (v. 895-897)。「肉親愛の地上的絆」に縛られていたマルグリットに「神の隠された秘密」[47] をイエスが「人間のために開かれたもの」として示されたのである。「傷つけた胸から流れ出る血」のイマージュはカトリーヌ・ド・シェンヌ (Catherine de Sienne) の神秘主義を思わせる。[48]

そのキリストの心の中から,「あなたの生命の糧を」とるように弟王は命じるのである。

Prens en ce cueur ta vie et ta pasture,
Duquel Amour le fondz a descouvert ;
Fay de son sang ta vie et norriture (v. 898-900)

その心の中から あなたの生命, 糧をとれ
その愛が真底を開いたのだから,
キリストの血を, あなたの生命の糧とせよ

「生命の糧」という聖書的命題は, あの「苦悩や死の食物」のイマージュを, 「涙や水」と同様に, ここにおいて聖別する。そして「死のイマージュ」で語られた「死の塊り」は最後には,「マナ・生命のパン」として収斂されるのである。

その時, 人間の罪業は,「開かれた胸」の奥に隠され, 完全に覆われて (il est bien couvert), 大審判の怒り (l'ire du Grand Juge) でさえも見ぬくことができなくなる (v. 901-903)。キリストの「御胸」はノアの箱船に例えられてもいる。

Comme dans l'arche au temps du grand deluge
Nul n'y perit qui par foy y prend place
Mect toy dedans, car il est ton refuge, (v. 904-906)

大洪水時代の箱船の中のように
そこに場を得る者は 誰れ一人滅ばない
その中に入りなさい イエスの心はあなたの避難所だから

「開かれたり」「覆われたり」という言葉は，『牢獄』では「地上的イマージュ」の「人間的悪」に付随する言葉でもあった。それが「神の力」によって新しい姿に変わる。[49]「キリストの力」もその「神の力」の写しであろう。『牢獄』ではその時，必ず「精霊」(Esprit) の介入があった。[50] ここでは「キリストの存在」そのものがその働きをしている。

『船』では「Esprit」という言葉は，まず，肉体を離れたフランソワ一世の「霊」として用いられる (v. 577-584)。そして例の「光り輝く精霊」も語られている (v. 544-546, v. 592-594)。しかし「信仰によって」(par foy) という言葉でかえられている例が多い (v. 487-489, v. 544-584, passim)。「精霊」を「火・炎」に例えたものも勿論見られる (v. 1357-1359) が，「剣・刃」のイマージュはない。ここでは「精霊」が主要テーマをなしていないからであろう。

キリストの胸に入ることを躊躇するマルグリットに「イエスは一つ場所を動かずあなたを待っている」(v. 907-909)。その為に「両足を釘で打たれたのだ」(il a cloué ses deux pieds) (v. 910-912)，そればかりでなく，「キリストはあなたを抱きとるために両腕をひろげ，接吻するために，その頭をさげられる。」(Ouvertz ses bras pour t'ambrasser il tient. v. 916-918／Son chef vers toy abesser vient／Pour te baiser, v. 910-912)。さらに「キリスト一人への愛」の説諭，「あなたの肉体を彼のみにまかせ，彼を抱きしめよ」(v. 928-933) と語る。この詩句は「モン・ド・マルサン」の「神への愛を語る場面」[51] に似て，ある種の神秘的エロチシスムを感じさせる。恋愛詩のいいまわしをそのまま宗教詩に移しかえたようで，妖しい雰囲気を持っている。

「開かれた腕」「さげられた頭」は「運動のイマージュ」(mouvement) を示す。[52] ここで『船』の中での「動き」について少し触れておく。

まず目立つのは「手」(la main) のイマージュである。

「あなたの方に引き寄せる手をお与え下さい」(Donne ta main, …Pour me tirer à Toy) (v. 511-513)。「乳のみ子の様に，その手の下に身をかがめ」(Dessoubz la main, tres puissante t'abaisses／…ainsy qu' enfant de lait) (v. 586-588)「私はあなたの手を感じる」(Je sens très bien ta main…) (v. 697-699)。「私が手と笞に口付けしてはいけないのか」(Ne doibz je pas main et verge baiser… ?) (v. 670-672)。この「笞」は『牢獄』にもみられた「神の笞」である。[53]「死する時，私は神の手と徳で飾られた腕を求めた」(Duquel la main en mourant j'ai requise et la fort bras de vertu décoré) (v. 1243-1245)[54]。「手と腕」のイマージュ。「暗い死せる肉体から，その腕は，私を引き出された……」(Par sa bras puissament／Arraché m'a du corps de mort obscure) (v. 1249-1251)，とこの付属的テーマのイマージュは非常に多いが，実に類似の表現の繰返しでもある。しかし，次の詩句は，現実に「キリストの声と動く手」を感じさせリアルでる。フランソワ一世の語りである。

Ecoute, seur, comme il frappe à ta porte,
En t'appellant d'une voix si très douce
Qu'i n'est esperit qu' elle ne reconforte ;

Sa main estend jusqu' au bas de la fosse,
La ou tu es, pour dehors te tirer,
Garde toy bien que tu ne la repousse (v. 601-606)

聞きなさい，姉よ，あんなにイエスが戸をたたくのを，
とてもやさしい声で，あなたを呼びながら
あの声に慰さめられない霊魂はいない

その手はあなたの深い穴底まで差しのばされる
あなたを外に引き出すために
その手を押し返したりしてはいけない

「動き」は『牢獄』のものと同じ描写的で静的である。(上の詩句には何か魂のおののきといった振動がある)。「手」のイマージュでは「神の右側右手」[63] (dextre, destre) のイマージュもある (v. 535-537, v. 691-696)。

「上昇のイマージュ」として「魂の飛翔」[64] があったが，ここでは「肉体と魂」の Antithèse を用いた次のものを挙げよう。

Si a moy veulx venir, faictz donc un sault
Hors de ta chair et toy mesmes renonce,
Car nulle chair ne peult saillir si hault,

Mais de descendre en bas te faict semonce
Jusqu'en enfer par plaisante contraincte
Mais d'un plaisir dont ne vault le marc l'once ! (v. 460-465)

もし私のもとへ来たいなら，さあ一跳び
肉体の外へ，そしてあなたを諦めて，

どんな肉体も　あんなに高くは飛べないから

しかし　低き所へ　肉体はあなたを呼ぶ
楽しい束縛をつかって，地獄の底までも
だがその喜びは1マルク[63]1オンスの値打ちもない

(sault, saillir という貫用の語句がみられる。)
もう一つ，一人の娘の母親であるマルグリットのやさしい「小鳥のイマージュ」がある。

Et tout ainsi que le desireuz zele
Faict a *l'oiseau*, pour ses petitz revoir,
Haulcer de terre au ciel la legiere aelle,

Mon ame fit a l'heure son debvoir
D'habandonner sa terrestre memoire
Pour se adonner a ce divin sçavoir :　(v. 40-45)

雛鳥に会う熱い思いが親鳥を
空高く飛びたたせるように
軽く翼を羽ばたかせながら，

私の魂は　さきほどその勤めを果した
魂の地上の記憶を捨て去って
神を知ることに身を捧げようと

(フランソワ一世が死を語る場面である)。この他，「上昇のイマージュ」はv. 331-333にもある。
再び「キリスト受難」のテーマにかえれば，それは「キリストの聖劇」のイマージュをもって終わる。「聖史劇」(mistere = Mystere) はキリストの「奇跡」(mystere) と重なって，当時よく用いられた Métophore であった。[64]「イエスだけが，人間への愛から，その聖劇を演じることをのぞまれた。全ては我々に報い我々のために（聖書に）準備されていたのである」(Luy seul… par amour veut jouer son mistere // Ordonner tout a nous et nous louer) (v. 922-924)。
『牢獄』では「仲介のイマージュ」として，「神の言葉」「聖書」が多様なイマージュで描かれ

ていた。[59] ここではマルグリットの名を折り込んだ次の詩句がめずらしい。

悩むマルグリットは自戒を込めて自問する。

Marguerite, et pourquoy n'as tu trouvee
*La margueritte* et *perle evangelique*
Que l'Escriture a si fort aprouvee ?　　(v. 316-318)

マルグリットよ，何故見つけなかったのか
あの真珠を，福音の真珠を
聖書があれほど讃えているのに？

マルグリット（真珠）は聖書的イマージュ「隠された真珠，精神的叡知」を示している。[60]

さて『船』の「仲介的イマージュ」は，次のフランソワ一世の「昇天」によって完結する。嘆きを止め理性に戻ったマルグリットを見て，フランソワ一世の魂は，安心したかのように旅立つ。「聖母の昇天」の如く神々しく[61]（他にも，v. 1435-1440)。

La nue blanche, ainsy que naige fine
Entre nous deux se mist et emporta
Ceste ame au ciel toutte claire et divine　　(v. 1420-1422)

純白の雪のように白い雲が
私たち二人の間にあった　そして魂を
完璧に澄み渡って明かるく神々しい天へ運んでいった。

## Ⅳ　結び

『船』は，死去したフランソワ一世の魂の昇天が大団円となっている抒情詩である。従って「天上的イマージュ」にとぼしい。「天上の食卓」(v. 499-501)，「天の至福」(v. 412-459) 等があるが，『牢獄』のあの Antithèse の詩句[62]と大差のないイマージュである。しかし，ダンテの「神曲」浄罪界のイマージュを借りた，「私は天国のあの大都市の市民である」(en Paradis／Citoyens suys de la grande cité)[63] (v. 475-477) は，唯一特殊である。「神及び神の力」を示すイマージュもあるがとりたてて書く程のものはない。

ここまで『船』と『牢獄』のイマージュを検討してみたが，数からいえば，「聖書的イマージ

ュ」が抜群に多い。そしてマルグリットの感覚そのものがつたわってくるものは，やはり「マルグリット自身」の日常的感情をうかがわせるオリジナルなイマージュのようである。

イマージュの用法についていえば「食物，水」のイマージュのようにテーマの流れ発展に従って，同じイマージュが少しづつ異なった意味を持たされている。「支配的イマージュ」(Image dominante) といったものを特定するには，まだ早いが，今の段階ではテーマによって，それぞれ違った「支配的イマージュ」の存在が予見できるように思える。また詩句に「慣用的イマージュ」を選び出しきら星の如く当てはめる技術は，Pierre Jourda の言葉[64]を待つまでもなく実に勝れている。次の機会には『シャンソン』『Comédies』を取り上げてみたい。

**【註】**

(1) 『晩年の詩』に於けるイマージュの諸相——試論 I 『牢獄』(「ロンサール研究」〔I〕，ロンサール研究会，1988) p. 69 (註 1) 参照，

(2) Ibid. (この論文は本年 9 月「日本ロンサール学会」で発表したものに手を加えたものである。)

(3) *Dernières Poésies*: Abel Lefranc, Paris, Colin, 1896. Introduction 及び Note. P. Jourda, *Marguerite d'Angoulême, Duchesse d'Alençon, Reine de Navarre* (I). Slatkine Reprints, Genève 1948. cf. "Les Sources". (p. 552-576), 典拠については殆ど Jourda 一人の研究となっている。

(4) *Chansons Spirituelles*: Georges Dottin, T. L. F. Genève: Droz 1971. *La Navire ou consolation du roi François Ier à sa soeur Marguerite*: Robert Marichal, Paris, Champion 1956. *Les Prisons*: Simone Glassson, Genève: Droz, 1978.

(5) P. Jourda. p. 577.

(6) Ibid. p. 578.

(7) Ibid. p. 578.

(8) Ibid. p. 579. "Le dialogue entre Dieu et l'homme, en distiques à rimer plates／est construit tout entier sur l'antithèse du Tout et du Rien.

(9) G. Dottin, *Chansons Spirituelles*

(10) P. Jourda, pp. 579～581

(11) *Le Style de Montaigne*, Floyd Gray, Nizet, 1958. p. 153 及び pp. 166～167.

(12) A. Lefranc, p. 349. Note 1: Ici commencent, pour se poursuivre jusqu'à la pièce LXXIV, les extraits du ms. 5112 de la bibliothèque de l'Arsenal dont les fos sont indiqués en marge. Ces poésies complètent celles que le Roux de Lincy a publiées dans son édition de l' *Heptaméron* (I, p. CCXL—CCL)

(13) *L' Heptaméron des Novvelles*, Le Roux de Lincy et Anatole de Montaiglon. (Tom. I～IV) Slatkine Reprints, Genève, 1969.

(14) *Théâtre Profane*, V. L. Saulnier, Genève, Droz. 1963. (I. Mallade, II. La Farce des deux Filles et des deux Mariées, III L'Inquisiteur, IV. Farce de Trop, Prou, Peu, Moins). ちなみに「二つの Comédies」もこの Saulnier 版に含まれている。

(15) R. Marichal. p. 231. A. Lefranc. p. 384. Marichal はこの詩句の出典についてダンテの「浄罪界」VI, v. 77. 及びトーレー (Tauler) の "Un Sermon pour Ie Ve Dimanche après a Trinité sur le Luc 5, 1" にその影響を見ようとしているが，確証はされていない。(Ibid. p. 231. Note 1). A. Lefranc はその序文で『船』の創作についての短い解説をつけている。(pp. XXXVIII～XL). V. L. Saulnier

も創作年代と当時のマルグリットの生活状況を検証している。(pp. 206～207)

(16) P. Jourda. p. 583. Note 127.

(17) *La Navire*, v.961～1089

(18) Ibid. v. 1420～1422

(19) Ibid. p. 261 Note. 548. Job. 34, 15. 及び p. 275, Note. 811-13, Paul, I, Cor. 15.

(20) 「ロンサール研究」 I. pp. 60～61.

(21) *La Navire* p. 262. Note 554 で「迷宮」は「14世紀から15世紀」に教会の敷石に数多く描れ「天上に行く前の人間生活を表現し，永遠の至福に至ることの遅延を象徴化していた」と R. Marichal は指摘している。そして，マルグリットは，1543年，François Ier が Nimes の近くの Saint Gilles 教会のものを Fontainebleau の宮殿に移したので，この「迷宮」を良く知っていたと，述べている。

(22) Ibid. p. 270, Note 702

(23) F. Gray, p. 161, Gray も「Viande」(肉) のイマージュについて，(「魂に外的な力によって起ること」) その食し方の段階の一つが avaller という動詞で表現されていることを指摘している。

(24) 「ロンサール研究」(I) p. 65-66.

(25) *La Navire*: p. 271 Note 727.

(26) Ibid. p. 252. Note. 334.

(27) Ibid. p. 270. Note. 70 Psal. 83, 7.

(28) Ibid. p. 285. Note 1030. Marguerite de France は Pléiade 派の最初の保護者であり学芸に秀いでていた。又同じイマージュは Comédies p. 118, v. 663 にもある。

(29) F. Gray, p. 169. Voici deux exemples où les images de l' eau sont groupées de façon à former une progression de la métaphore banale jusqu' à une sorte de concept métaphysique où l'eau symbobise l'essence mobile que Montaigne trouve en lui même.

(30) Ibid. p. 169 Note (22) L'image de l'eau est parmi celles qui préfèrent, soit les amateurs du mouvement comme Montaigne et Proust, soit ceux qui sont tourmentés spirituellement comme Sponde et Pascal et pour qui l'écoulement intérieur ressemble à l'action décomposante et inévitable de la mer.

(31) Ibid. p. 162. A coup d'images il dessine pour nous cette âme constamment assaillie par le vent des passions qui dérange son ≪branle≫ normal et constant.

(32) *La Navire*: v. 1～3.

(33) Ibid p. 162. Note (12) L'image du vent dans son sens actif est assez rependu au XVIe siècle et se trouve dans les dizains de Scève sous la même forme que dans les Essais. L'image statique du veut représente le vide dans la phrase de Montaigne (et de Sponde).

(34) 「ロンサール研究」(Ⅰ) pp. 50～51

(35) *La Navire*: p. 272, Note 751.

(36) Ibid: p. 266, Note 625 及び Note 629. Note 630.

(37) Ibid: p. 277. Note 856. P. Michault の *La danse aux aveugles* の中で既に見られると指摘。

(38) 「ロンサール研究」(Ⅰ) pp. 58-59.

(39) *La Navire*: p. 294. Note 1232

(40) Ibid.: p. 290, Note 1129.

(41) 東洋女子短期大学紀要 No 9. (1977)「シャンソン，スピリチュエル」Note 21 参照 (拙論): Lucien Febvre, *Au coeur religieux du XVle Siècle* (Dolet propagateur de l'Evangile) S. E. V. P. E. N. (1968)

(42) 「ロンサール研究」(Ⅰ), p. 55

(43) *La Navire*; p. 304. Note. 1451. Gen. 22; 17. 24, 60; Exod, 20, 10. etc.

(44) Ibid. p. 279. Note. 886.

(45) *La Navire*: p. 278. Note. 877, Note 878, cf. Joan. 1, 29.

(46) 「ロンサール研究」(I) p. 54:「知識の牢獄」

(47) Ibid. pp. 53〜54

(48) カトリーヌ・ド・シエンヌ「イタリア文学史」(中世) (p. 174 以下) 現代思潮社 デ・サンクティス (池田他訳) 1970

(49) 「ロンサール研究」(I) pp. 53〜54. pp. 60〜61.

(50) Ibid. pp. 57〜60

(51) 「モンード-マルサンで上演された喜劇」, (拙論) 東洋女子短期大学紀要 No. 11 (1979).

(52) 「ロンサール研究」(I) p. 67.

(53) Ibid. p. 66.

(54) *La Navire*: p. 295. Note. 1245. Lib. Sap. 11:22.

(55) Ibid. p. 261. Note 535 Matth. 25: 33. Paul. Rom. 8, 34. Ephes. 1, 20. Colos 3, 1. Hebr. 1, 3; 10, 12; 12; 2.

(56) 「ロンサール研究」(I) pp. 62-63

(57) *La Navire*: p. 258. Note. 465. Le marc, poids qui sert à peser les métaux précieux, vaut, à Paris, huit onces.

(58) *Les Prisons*, cf p. 242. v. 3211 (Glasson 版) *La Navire*: p. 281. Note 924.

(59) 「ロンサール研究」(I) pp. 58〜60

(60) *La Navire*: p. 251. Note 317 cf. Matth. 13, 45-46. その解釈は伝統的なものである。Marichal は Briçonnet の書簡集 (Becker) p. 154. の Lefèvre の教えを指摘している。及び Febvre. *Autour de l'Heptaméron* p. 98.

(61) Ibid.: p. 303. Note. 1436. TELLE の Ficin の影響説をしりぞけ,「聖母の受胎」を説明する中世来の古い comparaison の引き写しだとしている。

(62) 「ロンサール研究」(I) pp. 64〜65.

(63) *La Navire*: p. 258. Note 477. Dant. Purg, XIII, v. 94. Paul, Herb, 11. 16. 13, 14. Apoc 21, 10-11; 22, 14.

(64) P. Jourda. (I) p. 357, p. 376, p. 406